

# 本学『社会福祉援助技術現場実習』（児童施設）の 教育効果に関する一研究

北 川 清 一  
久保田 理 雅  
加 藤 純

## A. 研究の目的

社会福祉従事者の仕事が直接にせよ間接にせよ人の生活に関わる援助をするものである以上、社会福祉教育が机上の知識学習で済まされないのは当然のことである。教室で学んだ理論や援助技術を現場の実践と結びつける訓練が伴ってこそ、社会福祉従事者としての基盤が培われるのである。

そこで、本学でも神学科にキリスト教社会福祉コースを設置した当初から変わらずに実習教育に力を注いでいる。特に、実習期間中に10名前後の小グループでの学習を継続しながら、春から秋の長期に亘る実習を行うところに本学の実習形態の特徴がある。また、専任教員を講義担当と実習担当に区分けしないで、学科の専任教員のほぼ全員が講義と実習教育の両方に直接携わっていることも特徴的である。

本学教員はこのような実習教育の成果をかなり自負しているが、その自負は教員側の主観的な手応えのようなものであり、客観的な効果測定が十分になされているわけではない。そこで、実習教育の効果を測定するひとつの試みとして、児童養護施設および乳児院で実習した学生に実習教育体制をどのように評価しているのかを問いかけるアンケートを実施したので、その結果を報告する。

また、今年度、明治学院大学の北川清一教授が研究休暇中の研究活動の一環として、本学の実習教育に直接携わり、実習教育の成果と課題について検討した。さらに、1996年度以降、児童養護の第一線で現場の仕事に携わる職員に実

習指導グループの担当をお願いしている。2年間担当された至誠学園の国分美希氏を引き継いで、1998年度は調布学園の久保田が実習指導グループを担当した。他の大学で社会福祉教育に携わる者として、また、現場の仕事に携わるものとして、本学教育の成果と課題について感ずるところを論評する。

近年、大学に自己評価の努力が求められ、さらには、学外の第三者による評価も重視されるようになってきている。今回のアンケートは学生による教育評価の一環とも位置付けられよう。北川による特別研究員としての論評は第三者による教育評価としても貴重な意味があると思われる。

## **B. 本学の実習教育体系**

### **1) 2年次の準備教育**

実習教育は本格的には2年次に始まる。2年次前期に『社会福祉援助技術演習』（2単位）を履修し、実習教育の目的理解や、実習先での対人関係作りの基本、体罰や性など倫理や人権に関する考え方などについて、ディスカッションやロールプレイなどを交えて学ぶ。

2年次後期には『実習前ゼミ』（2単位）を履修し、実習先分野別に小グループ学習をする。各グループでの進め方は各分野の実態や教員の趣向によってかなりの差異があるが、主な学習課題は、実習先施設種別の理解、記録の書き方、実習先での指導の受け方、実習先施設の選定、実習目標の設定などである。施設見学は各分野の担当教員の判断で適宜実施している。

### **2) 3年次と4年次の実習科目**

3年次には、『社会福祉援助技術現場演習』（6単位）を通年で履修し、30日の実習をする。実習先は、老人福祉施設、障害児者施設、児童養護施設、母子生活支援施設、婦人保護施設である。福祉事務所や児童相談所、病院、社会福祉協議会などでは受け入れ期間が2週間に限定される場合が多いので、4年次で『社会福祉実習Ⅱ』（3単位）として履修する。この他、精神保健福祉分野での実習や国際社会福祉実習を実施している。

本学での実習科目はいずれも卒業に必要な必修科目ではない。これは、卒業のために必要だからという理由だけの実習は実習先に迷惑をかけ不適切だとの考えなどがあってのことである。しかし、実態としては大多数の学生が3年次に実習を履修する。毎年、2～3名が実習を4年次に延期することがあるが、全く実習をしないで卒業する学生は極く少数である。

### 3) 3年次の実習の進め方

3年次の実習では、5月下旬に1～2週間の集中実習を行う。その後、児童や母子の分野では、6月から10月頃まで毎週1～2日実習先に通う。途中8～9月の夏期休暇期間中に1週間程度の集中実習を実施する。しかし、このような実習日程は、介護実習なども加わって実習生の受け入れが急増している実習先ではかなりの迷惑をかけるのも事実で、老人や障害児者の分野では集中実習の割合が多くなっている。児童分野でも、ここ2年程の間に集中実習を増やして欲しいとの強い要望が聞かれるようになり、今年度は3施設で集中実習の割合を大幅に増やした日程を組んだ。

3年次の実習期間中、大学では前期から後期にかけて毎週木曜日に90分間、分野別のグループ学習を実習している。今年度は、専任教員4名と非常勤講師5名と特別研究員1名の計10名が分担した。

### 4) 実習指導の教職員体制

実習に携わる教員は上記3年次グループ担当者の他に、主として4年次の実習や国際分野や精神保健福祉分野での実習を担当する教員を加え、専任教員が7名、非常勤講師が6名となっている。学科職員のうち1名が実習関連の事務を担当している。この全員が集まり実習について協議検討する実習会議が月に1回開催される。現在、実習主任は福山和女助教授である。

## C. 児童分野の実習実施体系

### 1) 実習先施設

児童分野と言っても、3年次の実習先は児童養護施設に限られている。児童自立支援施設では通年型の実習は無理であること、乳児院は社会福祉士の国家試験受験資格取得のための指定施設には含まれないことなどが理由である。ただし、98年度は、3年次に乳児院での実習をしたいという強い希望があり、1名が『社会福祉実習Ⅰ』（6単位）として乳児院で実習をして、児童分野のグループ学習に所属した。

30日のうち20日近くは週1～2日施設に通う形態で実習するため、実習先施設は学生の住居から1時間程度で通える地域に限定される。今年度の実習先の大半は東京都内の児童養護施設で、埼玉県と神奈川県内の各1施設でも実習生を受け入れて頂いた。

実習先を選ぶ第1段階では、どんな実習先を望むかを学生に問いかける簡単なアンケートを実施するが、実際には希望の条件を十分に満たすことは難しい。担当教員が、実習先までの距離や実習先と学生の相性などを考慮して1～2ヵ所の施設を候補として示した後、学生はパンフレット類で読んだり先輩実習生から話を聞いて、納得できれば、そこを候補にして実習の受け入れを依頼する。20人前後の実習生の希望を調整するのに現状では3～4ヵ月を要している。

### 2) 実習先と大学の指導体制

実習先では、一人の職員がスーパーバイザーとして特定されている場合もあるが、日常の指導は実習日に勤務をしている職員が担当して下さっている。そのため、職員の公休日が決まった曜日に固定されているか等の条件によって、毎回同じ職員から指導を受ける学生も、毎回の様に違う職員から指導を受ける学生もいる。

大学側の指導体制としては、北川、久保田、加藤の3名がそれぞれ学生7～8名の小グループを担当した。

実習先は毎年続けて実習を受け入れて頂いている施設が多いので、実習に先

立って教員が施設を訪問することは少ない。今年度は1ヵ所だけ訪問した。実習前のオリエンテーションは学生のみで施設に出向いている。実習を終了する頃には必ず担当教員が施設を訪問し、実習生と実習先の指導職員と三者で実習の成果を振り返る。従来は実習半ばの7月頃にも施設訪問をしていたが、現状では電話で様子を伺い、実習生が目標を上手く設定できずにいる時など必要に応じて施設訪問をしている。また、毎年1回、大学を会場にして実習協議会を開催しているが、今年度は9施設から参加して頂いた。

実習記録は実習先と大学に各1部を毎回提出することとなっているが、記録も実習先と大学のコミュニケーションの重要な手段だと考えられる。記録に対する実習先職員のコメントが大学に伝わり、大学でのコメントが実習先に伝わるように実習生を指導しているが、実際には両方に一部ずつ提出するだけでもかなり煩雑になり、コメントの交換までは徹底できていない。

### 3) 実習内容

実習は生活場面が中心の内容である。老人福祉施設などで寮母職と指導員職の役割分担が比較的明確にされているのに比べると、児童養護施設では「保母がケアワーク、児童指導員がソーシャルワーク」という分業はそれほど明確にされていない。保母実習と指導員実習とを明確に区別している実習先は現在2箇所だが、今年度は1施設で2名が前半を保母実習、後半を指導員実習として受け入れて頂いた。他の施設では特に区分をしていないようであり、教員側も「保母実習ではなく指導員実習を」という要望をしていない。従って、実習生もケアワークをせずにソーシャルワーク実習をするということは無く、多くの実習生は6名から十数名程度の居室に配属されて、生活を共にしている。日常生活で子どもや職員と接する中から如何に学ぶかが実習の成果に大きく影響すると思われる。

日常生活場面の他に、行事への参加、調理室での実習、養育家庭センターの見学、職員会議への出席、児童相談所などとの協議会への出席、地域や学校の行事への参加、ケース研究を書き発表する訓練など、各施設で様々な実習内容

を工夫して頂いている。

#### D. 研究の方法

本学の児童施設分野での実習教育の成果を客観的に評価するための材料を得ることを目的として、学生にアンケートを実施した。具体的には、自由記述（20問）と選択式（11問）の設問を設けた『社会福祉実習自己評価表』を12月上旬のグループ学習の際に配布し、翌週回収した。

なお、このアンケートの様式は、北川が明治学院大学で用いている様式を基にして、本学の実習の形態に合わせて一部を改変して作成した。表紙には学生氏名や実習先施設名などを記入する欄を設けた。また、集計した結果を大学紀要に報告することの了承を求める説明を、個人情報保護する約束と併せて表紙に明記した。

#### E. 結 果

回収率は100%だった。すでに実習を終了していた学生20名に、実習が1～2回残っていた学生1名も加えて、合計21名の回答を分析対象とした。21名の内訳は、男性3名：女性18名、3年生20名：4年生1名、児童養護施設実習20名：乳児院実習1名、だった。

選択式の設問に対する回答を集計した結果を表1、表2、図1に示した。表1から順に追いながら、関連する自由記述の内容を一部紹介する。

##### 1) 実習体験全体の満足度

表1の1行目には、「実習先での体験や大学での学習を総合的に含めて、実習についてどのように感じますか」という問に対する回答の集計結果を示した。選択肢を選んだ理由を説明する欄を設けたので、その内容を一部紹介する。

「満足」と「とても満足」の回答を合わせて6割を越えている。「満足」を選択した学生の記述には、まず精一杯頑張ったという充実感が目に付く。次いで、実習先での学習の密度の濃さ、施設理解の深まり、自己理解の深まり、な

表1 児童施設実習での教育体制に対する満足度（設問別の集計）

	とても 不満	不満	やや 不満	普通	やや 満足	満足	とても 満足
総合的満足度	0	0	0	3	5	12	1
実習先での学習内容	0	0	3	2	10	4	2
実習先スーパービジョン	1	3	6	3	1	5	2
大学での指導方法	0	1	3	4	4	8	1
実習前の準備教育	0	1	7	8	2	3	0
実習日程	0	0	6	7	2	4	2
	とても 不適切	不適切	やや 不適切	普通	やや 適切	適切	とても 適切
記録の様式や提出方法	0	0	7	8	5	0	1

どが指摘されている。やりたいことを全部やれた満足感や自分の成長を記したのものもあるが、一方で、自分の課題が見えたことや戸惑いや行き詰まりも含めて良い体験だったと評価しているものもある。「やや満足」を選択した学生の記述には、体験や学習の成果を指摘する記述がある一方、自分が積極的に取り組めなかった「反省」や実習の負担感を記している記述が目につく。「普通」を選んだ学生の場合、さらに「反省」のニュアンスが強く、自分自身の課題の大きさを記している。

学生が実習を通して何を学んでいるのかは重要な情報だと思うので、学生の記述内容を良く集約していると思われる回答例を要約して紹介しておく。

「満足」を選択した学生の記述例：

[子どもとゆったり関わりを持てたり自分で考える時を持てたので、児童養護施設の課題や自分自身の課題を見つけることができた]

[子どもだけでなく、環境・地域・制度などについて繋げて考えることの重要性を感じられた]

[実際の人間関係の中で瞬間瞬間に生ずる出来事に対応し学んだ。その出来事や対応について振り返る授業の時間を持てた。この2点で、考えることと学ぶことの重要性に気付けた]

「普通」を選択した学生の記述例：

「施設の職員にたくさんの指導をして頂き良かった。しかし、自分自身の課題が多く残り後悔も多い。体験を通して課題に気付いて良かった。」

## 2) 実習先での学習内容に対する満足度

表1の2行目に「実習先での学習内容に対する満足度」に関する回答を集計した。「やや満足」を中心とする分布である。

実習先での学習内容に関連して自由記述の設問を3問用意した。第一は「実習をして良かったと思うこと、実習の成果は何ですか」という問いで、先の全体満足度に関する自由記述と重なる内容が多かった。これは設問の失敗であり、実習先での学習内容に限定した問いかけをすべきだった。

次に「実習を通して学びたかったのに学べなかったこと」を問いかけたところ、親や家族との関わりを挙げる記述が最も多く、次いで、児童相談所等との連携、地域との関係、日誌や育成記録の内容、会議への参加、問題行動への対応など踏み込んだ職員の処遇実践、などが学びたかった項目として指摘されている。

3問目として「実習中に困ったことや疑問に思ったこと」を記してもらったが、回答は千差万別だった。実習の枠組みに関しては、実習開始時期の遅れや、毎回の実習終了時間の曖昧さ、他の実習生との重複、等の記述があった。その他、寮舎による生活の違いや職員間の考え方の相違への戸惑い、一人で複数の子どもに対応する困難、などの指摘も見られた。また、実習の意味や目標を見失う時期があったことも2名程により記入されていた。

## 3) 実習先でのスーパービジョンに対する満足度

表1の3行目に「実習先でのスーパービジョンに対する満足度」に関する回答を集計した。回答は「やや不満」と「満足」とをピークに二極化している。自由記述で顕著なのは、スーパービジョンの時間を毎回とって頂いた場合に満足度が高いことである。一方、不満の理由の多くは時間の不足であり、スー

パービジョンの内容ではない。

なお、実習先に関して「今回の実習先を後輩に推薦できますか」との問も設けたが、「大いに推薦したい」11名、「推薦しても良い」8名だった。

#### 4) 大学での指導方法や内容に関する満足度

表1の4行目に「大学および児童福祉分野での指導方法についての満足度」に関する回答を集計した。自由記述を読むと、主に3年次の実習指導を中心に回答した学生と、準備教育も含めて評価の対象とした学生とがいることが判る。準備教育を含めて評価した学生に、不満の方向の回答が多い。

3年次の実習指導については、グループ学習で体験や考えを共有でき励まし合えたことを「満足」の理由として挙げる回答が圧倒的多数を占めた。たとえば、次のような記述である。

[少人数のグループだったので意見が言いやすかった]

[他の実習生の体験や意見を基に、個人では考えつかない理解ができ、視野に広がりを持てた]

[実習中のグループ学習で、その時々に必要な知識が得られた]

[現場の職員（久保田）から説得力ある助言を頂き、気持ちも受け止めてもらえた]

しかし、自分の目標があいまいになったり、実習先で毎日が平穩無事にすぎたりする時には、グループ内での発言がしにくいという指摘もあった。3年次の実習指導に関する具体的改善案としては、個別面接の時間を設けて欲しいという希望を2名が記していた。

表1の5行目には「実習前教育への満足度」に関する回答を集計した。「普通」を挟んで、「不満」の方が多い結果である。不満の理由で最も多いのは、不安や恐れが増して萎縮したという記述である。具体的には、「実習生は大学の看板を背負っている」と複数の教員から繰り返し聞かされて「失敗はできない」と思ったという感想があった。また、実習前ゼミでのロールプレイが「じゃ、どうしたら良いのか」という答がないまま終わったことから来る不安

についての指摘が多かった。さらには、特別な練習をすることにより実習先では子どもたちと特別な接し方をしなければいけないような気持ちになったこと、なども判った。また、理論学習や知識学習の不足を数名が指摘した。その他、[養護施設のことが解らないのに目標を立てるのは困難][目標に関する指導が不足]など目標に関する指摘が数名からあった。

## 5) 実習日程に関する満足度

表1の6行目に「集中実習と通い実習との組み合わせという実習の進め方についての満足度」に関する回答を集計した。「普通」を中心に、ほぼ当分に「不満」側と「満足」側に分かれている。

「満足」の回答では、初めの集中実習で子どもとの関係作りが進み、その後の長期間の実習で子どもとの関係が深まり、子どもの成長が見られることを指摘している。また、1週間の時間があって1回の実習を深く振り返れたとの記述も見られた。一方、「不満」の回答で多いのは継続性を保つ難しさである。実習日以外の1週間の出来事が解らず子どもへの変化に戸惑うことや、子どもとの関係が1週間経つと振り出しに戻るように感ずるとの指摘である。また、気持ちを長期間維持する大変さ、早朝家を出て遠くまで通う大変さ、等も記されていた。週2日ずつ実習をした学生からは、子どもとの関係が進んだことや、1泊した翌朝子どもの変化が見られる利点が指摘されていた。

## 6) 実習記録の様式や提出方法の適切さ

本学では、毎回の記録の1頁目には目標や一日の流れなどを記入する欄が設けられているが、2頁目以降はルーズリーフ2～3枚に具体的場面と考察を記すことにしている。ルーズリーフよりも項目があって区切られている方が良いとの意見を3名程が記していた。一方、たくさん書きたい日も書くことが無い日もあるので分量が決められていない方が良いとの意見も複数あった。様式には問題が無いとしながら多くの学生が指摘したのが、コピーを取って実習先と大学の両方に提出することの煩雑さである。苦勞して記入しただけに、記録が

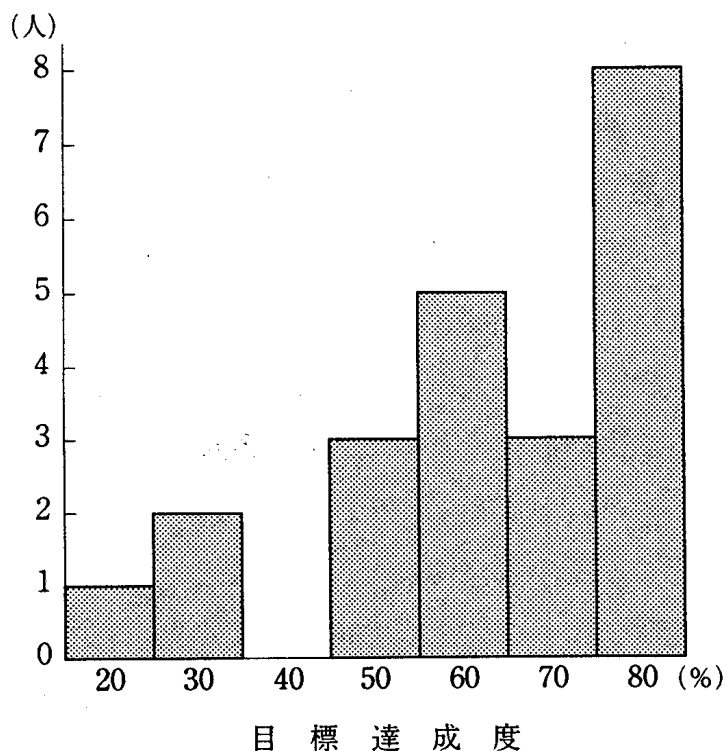
読まれなかったり、なかなか返してもらえない場合には不満を感じるようである。

記録のメリットを指摘した回答もあり、[自分の考えをまとめるのに役だった][施設と大学の両方で指導が得られ、考え方が偏らずに済んだ]などの記述があった。

## 7) 実習目標達成度に関する自己評価

図1に「実習目標を何%程度達成できましたか」という問への回答を集計した。学生が目標としたのは、主として子どもの理解や関わり方、職員の援助方法理解、施設理解、などである。達成度70%以上で半数を占めるが、自由記述の内容は数値によってさほど変わらない。多くの学生が、ある程度目標が達成されたが課題も残ったと記している。違いがあるとすれば、達成度を低く記した人の自由記述には、課題に今後取り組もうとする意欲よりも、課題を残したことを後悔するニュアンスが強いことであろう。

図1 児童施設実習での目標達成度に関する自己評価



## 8) 児童施設実習の前後における進路希望状況

「社会福祉を卒業後の進路として考えていますか」との問いに対する答を表2に集計した。実習前の進路希望よりも動機が低減した学生が8人、動機が向上した学生が3名で、9名は実習前後での変化が見られない

表2 児童施設実習の前後における進路希望状況（クロス集計）

実習前	実習後	進路として は考えない	ためらいを 感ずる	進路のひとつとして	積極的に考 えたい	合 計
社会体験のひとつとして実習した		1				1
あまり考えないまま実習に参加した				1		1
進路の一つとして考えていた		1	4	3	3	11
積極的に考えていた				3	6	9
合 計		2	4	7	9	22

志望動機低減 8人： 動機維持 9人： 動機向上 3人

## F. 質問項目間の関連についての分析と結果の考察

### 1) 質問項目の関連

次に、質問相互の関連性を分析しながら考察を加えたい。表3に、各質問項目に対する回答傾向の関連性を大まかに把握するために、相関係数の一覧を掲げた。今回の調査はあくまでも予備調査と位置づけ、平均の差の検定などの統計処理は行わずに、特徴的な点をざっと指摘するに留めておく。

まず全体の満足度は目標達成度と関連が見られる(a)。一方、両者と実習記録の満足度とに負の相関が見られる点は興味深い(b)。課題意識が高まってくると、何でも書ける自由な形式よりも課題の整理に役立つ枠組みが必要となるのかもしれない。

実習後の進路希望も実習の教育効果を示す指標として重要だろう。まず、実習後の進路希望と実習全体への満足度に正の相関が見られる(c)。しかし、実習先の学習内容やスーパービジョンと実習後の進路希望の間には関連が見られ

表3 実習教育評価に関する各質問項目に対する回答傾向の関連性

	全体満足度	目標達成度	記録	大学指導	準備教育	後・進路	前・進路	日程	実習先	S	V
目標達成度	0.415 <sup>Δa</sup>	—									
記録	-0.327 <sup>b</sup>	-0.510 <sup>*b</sup>	—								
大学指導	0.185	0.504 <sup>*</sup>	-0.044	—							
準備教育	0.172	0.007	-0.028	0.346	—						
実習後進路	0.512 <sup>*c</sup>	0.321	0.035	0.636 <sup>**e</sup>	0.361	—					
実習前進路	0.146	0.110	-0.090	0.334	0.068	0.522 <sup>*</sup>	—				
日程	0.182	-0.204	-0.087	0.260	0.295	0.554 <sup>**f</sup>	0.240	—			
実習先	0.241	0.077	-0.102	-0.021	0.463 <sup>*</sup>	0.160 <sup>d</sup>	0.088	0.063	—		
スーパージョン	0.223	-0.119	-0.088	-0.330 <sup>i</sup>	0.098	-0.077 <sup>d</sup>	-0.006	0.013	0.455 <sup>*g</sup>	—	
推薦	0.203	-0.250	0.200	-0.229	-0.058	0.226	0.149	0.342	0.117	0.434 <sup>*h</sup>	

※<sup>Δ</sup>: p<.10    \*: p<.05    \*\*p<.01

※ a から i の小文字は、本文中での説明との対応箇所を示す。

ない(d)。一方で、大学指導への満足度と実習後の進路希望との間に正の相関が見られる(e)。しばしば、実習で社会福祉現場の現実を知ると就職意欲が低下すると言う発言を耳にするが、今回の結果は、実習後の進路希望は大学の指導との方が関連が強いことを示している。今回の結果だけで何とも言えないが、就職意欲の低下を現場の責任にする論調は控えた方が良さそうである。

また、実習後の進路希望と実習日程への満足度に関連が見られた(f)。将来社会福祉に進む意識が明確な場合には通年の長い実習期間や1週間の間隔などの長所を活用しやすい一方、希望が多少ともあいまいになると実習期間の長さが負担に感じられるなど通年制の弱点の方が浮き彫りになるのではないかと推測される。

実習先のスーパービジョンへの満足度は実習先の学習内容と関連がある他(g)、その施設を後輩に推薦するかどうかの判断とも関連を示している(h)。興味あるのは、スーパービジョンへの満足度が大学の指導への満足度と負の相関傾向を示していることである(i)。つまり、実習先でも大学でも良い指導を受けられたというパターンではなく、どちらか一方の指導に満足度が高いともう一方への満足度は相対的に低く評価なるのである。

## 2) アンケート結果の考察

項目間の関連を踏まえた上で、アンケート結果全体の考察をしておこう。

まず、実習体験全体には満足度が高いという結果が得られた。しかしこれは前菜からデザートまで全て満足ができたと言うよりも、課題が見つかったことも含めて一つでも良いことがあれば実習の成果を前向きに評価しようと言う学生の姿勢の表れであり、実習教育体制に関する各質問項目には不満の声もある。特に事前学習において学生の不安や緊張を解消する配慮や、理論や知識学習を充実する必要性が明らかにされた。

自由記述から見ると、3年次になってからのグループ学習は概ね肯定的に評価されている。評価する点はグループによって違いがあり、北川が担当したグループでは理論や知識の学習に関する記述が多く、久保田が担当したグループ

では「気持ちを受け止めてもらえた」「安心感が得られた」と言った記述が目立った。それぞれの担当者が大切にすることが学生にうまく伝わった成果であろう。

## G. 指導体験を通して見えてくる本学実習教育体系の成果と課題

他の大学で社会福祉教育に携わる教員として、また、児童養護の現場の第一線で働く職員として、ルーテル学院大学の実習教育に直接携わった結果として見えてきた本学実習教育の成果と課題について論じてみたい。

第一には、ルーテル学院大学の実習教育プログラムは現在の社会福祉教育界において独自性があり、その財産を受け継いでいく姿勢が理解できた。例えば、実習前教育でのロールプレイ技法活用などである。また、実習担当教員の多さと実習指導グループの単位の小ささには驚嘆するものがあった。

実習会議を非常勤講師や職員も参加する形で開催している点も参考になった。学科職員が単に教員をサポートするだけでなく、学生指導との関連で自らも専門性を発揮している場面に幾度か遭遇できたのも幸運だった。

次に、実習先が簡単に居心地の良い所になるはずはないので、毎週大学の実習指導グループに戻ってきては不安を解消することができるのは有益である。実習指導グループでは、時に各自の生い立ちも見え隠れして発言しにくいこともあったかもしれないが、仲間関係の良さもあってか臆することなく発言がなされ、各自の家族や家庭に大きな違いがあることも実感され、各自の問題として深めることができたと思われる。

一方、ルーテル学院大学が考えるソーシャルワーカーのイメージがどんなものかは十分に把握できなかった。関連して、生活型施設での実習が多い現状では、生活型施設での実習にソーシャルワークをどう結びつけ得るのか明確なイメージを描けるようにする必要があるだろう。また、2年次から4年次まで学習を積み上げる過程で、3年次の実習においては何を狙いとし、それが大学としてイメージするソーシャルワーカー像とどのような関係があるのかが十分に把握できなかった。さらには、3年次の実習が卒業論文なども含めた4年次

以降の次のレベルの学習にどうつながるのかを明確にする必要がある。

実習会議については、学科会議や教授会との関係が見えてこなかったのは残念だった。また、実習会議で実習に関する諸課題を検討できる点はよいが、それでもなお各教員の考え方の差異が感じられ、実習教育に関する共通理解を再構築する必要を感じた。実習の日程に分野間でばらつきがあるだけでなく、同じグループ内でもばらつきがあるので実習指導グループでは授業としての年間計画を立てにくい問題も感じた。学生の性格や学ぶテーマ、施設の特性などを考慮して、実習日程による実習の教育効果の違いについて十分検討する必要があるだろう。

実習が長期に及ぶことから、実習中に気付く学習課題への対応を充実する必要があると感じた。実習終了後に課題として深めることもひとつの方法ではあるが、実習中に並行して学べるような工夫が求められる。その関連で、実習先でのスーパービジョンの状況を掘み、実習生が現場で直面している課題に応じた指導を実習生それぞれに提供していく配慮も必要である。

しかし、実習指導グループでは、学生同士の意見交換を重視するあまり、学生と個別に話す機会がほとんどなく、学生と教員との間の細やかなコミュニケーションが不十分となった。また、話し合いから新しい自分を発見することもあり、話し合いを重視しつつ個々の課題を発見し追求する場としての活用を図る必要があるように思われた。

学生一人ひとりが充実した実習教育体験を通して目標を達成し、そこから新たな問題意識を持って次の学習へと繋げていけるように、より有意義な内容での実習指導を追及し、効果的な実習教育体制を育てていきたい。

## おわりに

本論文は、3人の協議により執筆した。しかしながら3人の考え方がすべて一致しているとは限らないので、共同執筆者としても異を唱えたい事が散見される可能性は十分にある。不適切な点があれば、最終稿をまとめた加藤の責任である。

また、本稿は児童分野で実習指導に携わった者がその範囲で論じているものである。本学全体の実習教育体制についても紹介しているが、それは児童分野の実習の位置づけを明らかにするためである。アンケートの結果が他の実習分野に該当する保証が全く無いのはもちろん、本稿は本学の実習教育全体についての代表性を持つものでないので、ご理解いただきたい。

最後に、本学の学生を実習生として受け入れて下さり熱心な指導をしてくださっている児童養護施設や乳児院の職員の皆さんと、年末の忙しい時期にアンケートに協力して、短期間に詳しく意見を記して下さった学生の皆さんに感謝したい。特に、調査紙の表紙に記名する形式にしたので教員に対しては匿名性を保てなかったにも関わらず、思っていることを率直に記して頂いたことに深く感謝をしたい。このような施設職員や学生の力を合わせて、本学の実習教育がさらに充実していくことを願っている。